



## 第57回 水曜公開礼拝報告（説教：木村 純二、奏楽：椎名 雄一郎）

2022年11月16日（水） 18：30－19：00

讃美歌：『讃美歌21』387番「刈り入れの主を」  
聖書：ヨハネによる福音書 15章 1－5節  
讃美歌：『讃美歌21』393番「こころを一つに」  
説教：「主につながり結ぶ実」  
頌栄：『讃美歌21』29番「天のみ民も」



### 【説教要旨】

イエスは父なる神をブドウ園の農夫、イエス自身をブドウの木、教えを聞く者たちをブドウの枝に例えているが、「豊かな実を結ぶ」と言われる「実」が何を表しているかという、それは「愛」、より詳しく言えば、自分が主体となって「愛すること」である。世間では自分の努力によって社会的成功を収めることを「実を結ぶ」と言うが、聖書は、イエスの十字架を通じて示された神の愛を受けることによって、周囲の人を慰め、励まし、労わるという愛の実を結ぶことができると教えている。

（本学文学部教授・大学宗教主任 木村 純二）

前奏：G.ベーム作曲 コラール・バルティータ  
《愛する神にのみ従うもの》Vers.1～6  
後奏：G.ベーム作曲 コラール・バルティータ  
《愛する神にのみ従うもの》Vers.7



ゲオルク・ベームは北ドイツ・リュネブルクの聖ヨハネ教会のオルガニストを務めた、北ドイツ・バロック時代を代表するオルガニストです。バッハは1700年から数年間リュネブルクの学校に通っており、その際ベーム氏のレッスンを受けたことが近年判明しました。バッハの作品にはベームの作品の影響が多々見られます。前奏、後奏とも同じ教会歌（コラール）による変奏曲ですが、その作品の独創性に若きバッハが惹かれたことが感じられます。

（本学文学部教授・大学宗教主任 椎名 雄一郎）

礼拝とその後の19時00分から30分までの椎名雄一郎氏によるオルガンによる賛美に29名の方が参加されました。

## 礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：椎名 雄一郎）

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685-1750）作曲  
1. 幻想曲 ト短調 BWV542/1

《種々の技法による6つのコラール》（《シューブラー・コラール集》）より

2. 〈目覚めよ、とわれらに呼ばれる物見らの声〉 BWV645
3. 〈愛する神にのみ従うもの〉 BWV647
4. 〈わがこころは主をあがめ〉 BWV648
5. フーガ ト短調 BWV542/2



冒頭と最後に演奏する《幻想曲とフーガ ト短調》BWV542は、元々別の時代に作曲されたものが後に組み合わせられた作品です。特にフーガは1720年11月、北ドイツ・ハンブルクを訪れた際にハンブルクの巨匠J.A.ラインケンに敬意を表して、彼の故郷ネーデルランド民謡のメロディーを主題としています。

幻想曲とフーガの間に3曲のオルガン・コラール作品を演奏します。この3曲はいずれも、礼拝時に演奏された教会カンタータをオリジナルとしています。〈目覚めよ、とわれらに呼ばれる物見らの声〉はマタイによる福音書25章の「十人のおとめ」のたとえを音楽として表し、コラール旋律はカンタータではテノールで歌われます。〈愛する神にのみ従うもの〉はカンタータでは二重唱の Aria で、コラール旋律はヴァイオリンとヴィオラにより奏されます。〈わがこころは主をあがめ〉はルカによる福音書1章46－54節の「マリアの賛歌」により、カンタータではコラール旋律はトランペットで演奏されます。バッハによるコラール作品の様々な編曲技法を聴いていただければ幸いです。

（椎名 雄一郎）

### 宗教改革者カルヴァン（3）ジュネーヴ総合施療院（近代的医療制度）

スイスのジュネーヴで16世紀に始まった社会活動の一つとして、今回は無料の義務教育機関である「ジュネーヴ学院」を紹介しました。今回は、「ジュネーヴ総合施療院 L'Hôpital Général de Genève」です。ここに近代的な医療、福祉活動の原型があることをお伝えします。

宗教改革が16世紀西ヨーロッパ社会に与えた衝撃の一つに修道院の廃止があります。これまで小さな村にも人々が歩いて集まれる範囲に一つの教会があり、その近くや、時に村の周辺に修道院が建てられ、神に近づく願いを持つ人々の生活の拠点でした。

宗教改革のスローガンは「聖書のみ」ですから、聖書で求められていない修道院制は廃止しました。すると、修道院が担っていた児童教育の他に、旅行者への宿の提供、貧者や病者の救済、孤児や老人の世話などの社会活動は、中腰を入れて市行交とボランティアの市民たちが取り組む活動に発展しました。

ジュネーヴでは、クララ修道院が解放された後、この施設で医療、介護、食料配給、孤児の世話などを一手に引き受ける「ジュネーヴ総合施療院」が1535年に誕生しました。市内では「物乞い」が禁じられ、労働が奨励され、聖書の福音主義に立脚する活気ある街造りが進展しました。それは今日では「公共の」医療・社会福祉制度となりましたが、キリスト教色が薄いという点で、新たな課題も浮上しています。

（宗教センターチャブレン 野村 信）



「飢えた人にあなたのパンを裂き与え…」(イザヤ58:7) Sauver l'âme, nourrir le corps (1535-1985) par Hospice Général, Genève, 1985.

### — 建築が語る東北学院の歴史（14） —

前号で大学本館の外壁に施されたレリーフについて紹介しましたが、これとよく似た図象が、本館にもう1種類（図1）、そして多賀城キャンパスの礼拝堂にも1種類（図4）あります。

図1は、本館の玄関から二階に至る階段室の壁面上部の様子です。カレッジ・ゴシック的なその図象は、学内の歴史的建築に施された図象の中で、最も多くの要素を重ねて出来ています。つまり①正方形のフレームに②後に礼拝堂でも使われる地形を配し、③剣形の対角線を重ねた上に④盾形を置き、⑤中央に「T」を重ねます（五重構造）。当初の設計図では2種類の字形が使い分けられる設計となっていたのですが（図2、図3）、結果的に一本化され、まとまりのある内観を呈しています。その重厚な図象は、キャンパスにおける本館の中心性を表現したものと考えられます。

図4は、多賀城キャンパスの礼拝堂の内部に設けられた図象です。盾の形は本館よりも幅広で、どちらかと言えば図2に近い輪郭です。一方、重ねられた「T」には、本館とよく似た字形が選択されています。設置の詳しい経緯は不明ですが、本館を参照して付されたものと考えられます。（工学部 崎山 俊雄）



図1:本館の玄関(階段室)上部のレリーフ

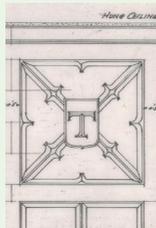


図2:図1部分の設計図①

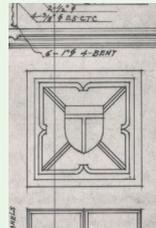


図3:図1部分の設計図②



図4:多賀城キャンパス礼拝堂

## 英国のクリスマス

私は中学・高校と、大学院の一部を英国で過ごしました。中・高時代には家族と、大学院以降には、友人と祝うクリスマスを経験しました。主に一家団欒の行事である点においては、日本のお正月とさほど大きな違いはありませんが、一つだけ大きく異なる点は、街中の交通網も止まってしまうことでしょう。唯一の移動手段は自転車や車、徒歩となります。お店も大部分が閉まり、日本とは対照的なとても静かなクリスマスでした。

しかしクリスマス・イヴの直前まで街はショッピング客で賑わい、その目玉はなんとと言ってもイルミネーションです。ロンドン市内の目貫通りには、年毎に異なる豪華なイルミネーションが飾り付けられ、地元の人も観光客も皆、点灯式を心待ちにして足を運びます。ハロッズの飾りもさることながら、一番はオクスフォード・サーカスを中心としたイルミネーションです。果たして次回はいつ足を運ぶことができるのか。その日を待ち望みつつ筆を置きたいと思います。(文学部講師 渡邊 有美)



## 美術による賛美 (17)



ハンス・ホルバイン(子)(1497/98-1543)の『大使たち』(1533年、ロンドン、ナショナル・ギャラリー)の絵は、功なり名を遂げた、ふたりの大使の肖像画です。生地のいい豪華で高価な衣装、貴重なダマスカスの織物や絨毯、イタリアのコスマティの大大理石の床飾りなどの富。また天球儀やコンパスなどの当時の最高の知的営みも示しています。しかしその下に宙に浮いた奇妙なものがあります。これはアナモルフォーゼといって歪んで描かれた絵で、絵の右上から見ると髑髏であることがわかります。すなわち「すべては空しい」(『コヘレトの言葉』1:2)です。

しかしさらによく絵をみてみましょう。左上の隅のカーテンが少し開いています。そこに裸体の人物彫刻が掛けられているのです。为什么呢？ 磔刑のイエスです。全ての営みは確かに虚しいのですが、最後にイエス様によって、この虚しい現実の営みがそっくり肯定されるのです。クリスマスの喜びもそれです。福音の絵画化として見事な作品です。

(理事長特別補佐(宗教センター担当) 鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー  
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」  
第23号

2022年12月7日発行

〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-264-6558

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp